

# 鶴山書院報

第19号

公益財団法人  
孔子の里

〒846-0031  
佐賀県多久市多久町  
1843番地3 東原庫舎内  
TEL 0952-75-5112  
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人  
理事長 香月正則

## 今の社会に孔子の教えを



公益財団法人孔子の里  
理事長 香月 正則  
(多久市長)

今の社会において、私たちは情報過多や変化の激しさに直面し、しばしば混乱や迷いを経験するようになってきました。このような時代からこそ、約2500年前に生きた孔子の教えに立ち返り、その知恵を日々の生活に活かすことが、より充実した人生を送るための鍵だと思えます。孔子の言葉は、弟子たちによって編纂された『論語』にまとめられており、現代でも多くの人々に影響を与え続けています。

学びの姿勢が大事で論語にも「学びて時にこれを習う、またよるこばしからずや」学んだことを復習し、実践する喜びを感じる重要性を説いています。また、「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」物事を知っているだけでは不十分で、それを好きになり、さらに楽しむことで、本当の知識や技能が身につくという教えがあり、物

事を正しく知り、そのことに実践と復習を繰り返すことを通じて楽しみを覚え、我が身のものになると教えられています。少し周りに目を向けると「徳は孤ならず。必ず隣あり」徳のある行動をとる人は孤立せず、必ず理解者や協力者が集まってくるという、人間関係における信頼の重要性についてを説かれています。

今の社会は情報過多の中に身を置き生活をしていかなければなりません。孔子の教えに耳を傾け、社会人になっても学びを続けることの重要性が増す現代において、孔子の「学び」の思想は、個人の成長と社会の発展に不可欠です。そのような中にSNSなどの情報が氾濫する時代だからこそ、与えられた情報を鵜呑みにせず、自ら考え、判断する力が求められ、人間関係でも表面的な繋がりでなく、誠実さや思いやりを大事にした人間関係を築くことで、より豊かな人生を送ることができると信じています。

孔子の教えは、現代社会においても私たちの行動や思考の指針となっており、単なる古い哲学ではありません。それは、自らを高め、他者と調和し、より良い社会を築くための普遍的な知恵であり、現代を生きる私たちにあって、人生を豊かにする最高の羅針盤となるでしょう。



「稲菜の舞」(東多久町 江口忠宏)  
多久百景写真コンテスト審査員特別賞作品

### 〈特集〉

第28回全国ふるさと漢詩コンテスト……………2

論語カルタ大会・縁起米の奉納式……………5

草場佩川の「山野一善」(其の四)……………6

石井鶴山が詠んだ殺生石と黒塚  
熊本大学 教授 中尾健一郎……………8

日本磁器の開発と展開―特別企画展「初期伊万里ビッグバン」でたどる草創期の磁器生産―  
佐賀県立九州陶磁文化館学芸員 巖 由季子……………10

草場船山「蟋蟀之吟」(翻刻文紹介其二・完)  
草場佩川の会事務局 石丸 隆司……………12

華表を仰ぐ(第六回)  
多久市郷土資料館長 藤井 伸幸……………15

多久の百景・来訪・来信・雑録・編集後記……………16

令和7年度

第28回

# 全国ふるさと

# 漢詩コンテスト

令和7年度「儒学と文化の里  
ふるさと漢詩コンテスト



▲香月正則理事長開会挨拶

令和7年11月29日(土)多久市東原庁舎講堂において、第28回全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式及び公開講演会を開催しました。この漢詩コンテストは、儒学と文化の里づくりを目的に、江戸時代の郷校東原庁舎で学ばれていた国学や漢詩に親しんでいたことが平成10年に始まったコンテストです。現在は、国内の漢詩大会の中でも指折りのコンテストと言われるようになり、江戸時代にあった教育機関である東原庁舎の歴史的背景がある文化事業として高く評価されています。

今回は、「祭」をテーマに募集。全国30都府県からの応募があり、応募者総数は120名、応募作品数は172点でした。

応募作品は、大木康先生(東京大学名誉教授)、鷺野正明先生(国士舘大学名誉教授)に審査いただき、最優秀賞に栃木県下野市齋藤昌枝様の『越中風盆』が選ばれました。表彰式では、全日本漢詩連盟会長を務められている鷺野正明先生から直接受賞作品に対する講評をいただき、専門的でわかりやすい作品の解説に受賞者の皆様も大変喜ばれていました。また、表彰式に併せ、公開講演会を開催しました。宇野茂彦先生(中央大学名誉教授、公益財団法人斯文会理事長)を講師に招き、『漢字の性質(漢字を使う意味)』と題し、ご講演いただきました。講演では、近年、多文化共生の名の下に「日本らしさ」が失われつつあることが危惧されています。その根幹にあるのが「言葉」の危機です。漢字は単なる記号ではなく、一字で意味を成す表意文字です。

戦後「当用漢字」による制限が行われました。それにより不自然な送り仮名など表音文字的な考え方に偏った結果、漢字本来の表意性が損なわれています。漢字が本来持つていた深い概念や意味が失われ、日本人の知的な語彙レベル

を低下させています。漢字は優れた知的ツールであり、制限に縛られる必要はありません。もっと自由に漢字を活用し、日本語の豊かさを守るべきだと解説いただきました。

表彰式・講演会終了後は、多久聖廟参道脇に新たに建立した最優秀賞の作品を陶板に刻んだ石碑の除幕式を関係者皆様で行いました。



▲除幕式(右から)吉田雅孝様(奨励賞受賞)、金澤武司郎様(入選受賞)、矢鳴豊子様(優秀賞受賞)、齋藤昌枝様(最優秀賞受賞)、宇野茂彦先生、鷺野正明先生、香月正則理事長、石田俊二教育長



公開講演会(講師:宇野茂彦先生)



作品講評(審査員:鷲野正明先生)

最優秀賞

越中風盆

齋藤昌枝

越中風の盆

栃木県下野市 齋藤昌枝

千燈萬炬照紅粧  
舞袖翩翩意氣揚  
古調管弦將盡夜  
吟蛩切切送新涼

千灯万炬 紅粧を照らし  
舞袖翩翩として 意気揚がる  
古調の管弦將に尽きんとする夜  
吟蛩切切 新涼を送る

講評 言葉の選択が的確で、起承転結の構成もしっかりしている。前半は祭りの楽しさ。後半は「古調の曲が終わりを迎え、代わって「吟蛩」が「切切」と聞こえる」と哀愁を詠う。「涼」の字が効いている。

優秀賞

郷村秋社

矢鳴豊子

郷村の秋社

福岡県遠賀郡 矢鳴豊子

祭幟翻風村社頭  
高天一碧笛聲流  
神輿共進稚兒列  
満目金波豊稻秋

祭幟風に翻る村社の頭  
高天一碧 笛声流る  
神輿と共に進む稚児の列  
満目の金波 豊稻の秋

講評 高く青く澄む秋の空と、見渡す限り黄金色に実る稲穂。その中を神輿と共に歩む子供たち。昔懐かしいほのぼのとした郷村の風景。子どもたちの楽しそうな声が聞こえてくる。

優秀賞

倭武多

浦上佳奈

倭武多

東京都国立市 浦上佳奈

燈籠百尺畫豪雄  
壯士挽車廻市中  
吳蜀君王臨魏武  
焰光赫赫燦長空

燈籠百尺 豪雄を画き  
壯士車を挽きて市中を廻る  
吳蜀の君王 魏武に臨み  
焰光赫々 長空を燦く

講評 倭武多は高大な灯籠に様々な意匠を凝らす。吳の孫権や蜀の劉備、魏の曹操の灯籠に焦点を当てながら赤壁の戦いのよう。結句の「長空を燦く」が効いている。祭りの熱気も伝わる。

# 入選

獺祭

獺祭

熊本県熊本市 林 孝子

林 孝子

獨對詩箋興有餘

ひとり詩箋に對へば興余り有り

案頭索句閱羣書

案頭句を索めて群書を閲す

縦横亂帙疊重卷

縦横の乱帙疊重の巻

笑擬江邊獺祭魚

笑つて擬す江邊獺魚を祭るに

講評  
獺(カワウソ)は捕つた多くの魚を並べる習性があり、これを「魚を祭る」とい  
い、転じて詩文を作るのに多くの参考書を並べて調べることをいう。自分も  
獺のようだなと。

# 入選

多久聖廟釋菜

多久聖廟釋菜

東京都渋谷区 岡田 讓

岡田 讓

朱殿深沈碧樹鮮

朱殿深沈として碧樹鮮やかに

迎神簫鼓透青天

迎神の簫鼓青天に透る

儼然如在孔夫子

儼然在すが如し孔夫子

正氣稜稜聖像邊

正氣稜稜たり聖像の邊

講評  
多久聖廟の釈菜を詠う。厳かな奏楽によつて孔子の靈を迎え、菜を捧げて靈を  
祀る。前半は、緑樹の中にある朱殿と、青空が印象的。後半は厳かな勇気か  
漂つ。

# 入選

山寺孟蘭盆

山寺孟蘭盆

神奈川県横浜市 金澤 武司郎

金澤武司郎

松柏蕭然月色清

松柏蕭然として月色清し

村民舞踊樂浮生

村民舞い踊り浮生を樂しむ

三更院落人歸後

三更の院落人歸るの後

時聽山中佛法聲

時に聴く山中仏法の声

講評  
「浮生を樂しむ」盆踊りの村人が歸つたあと、寺では「仏法僧の声」が時おり  
聞こえてくる。この世に歸つて来た先祖の靈と過す孟蘭盆の真意を悟る、  
月の清らかな夜。

# 奨励賞

札幌雪祭りを懐願す

懐願札幌雪祭

佐賀県神埼郡 吉田 雅孝

吉田 雅孝

大遼雪像美無窮

大遼の雪像美なること窮まり無し

遊客驚呼讚鬼工

遊客驚呼して鬼工を讚ふ

屹屹誰知寒苦業

屹々誰か知る寒苦の業

幽玄如画是人功

幽玄画の如くも是れ人功

講評  
雪像は精緻で美しく、神業のようだと感歎する。しかしそれらは、極寒のな  
か、人々がコツコツと造つた「人の業」であると。前半の描写が的確で、転句の  
「屹屹」が効いている。



作品の説明をする最優秀賞 齋藤昌枝様



公開講座

# 第三十回 多久市論語カルタ大会開催

令和7年12月7日(日)に第30回多久市論語カルタ大会が多久市立東原庁舎中央校前期体育館で開催されました。

この大会は、儒学の祖孔子の教えである論語を百人一首式にしたカルタを使い、論語の教えの人としてのあり方や生き方を学び、その教訓を生活に活かしつつ、論語カルタ大会を通じて、多久市の歴史や文化を広く発信し、地域の活性化を図ることを目的に開催されています。

今回で30回の節目の大会に市内の未就学児の部から高校生以上の一般の部まで51名が参加し、会場はカルタを取る子供たちの元気なかけ声や応援する保護者たちの大きな声援が響きわたりました。大会の成績が次のとおりです。

## 【未就学児の部】

- 1位 清藤 奏真 (こばと保育園)
- 2位 武富 旭松 (こばと保育園)
- 3位 副島 未央 (こばと保育園)

## 【1年生の部】

- 1位 石川 未琴 (西溪校)
- 2位 新名 亜紀 (東部校)

## 【2年生の部】

- 1位 石橋 達紀 (西溪校)
- 2位 諸岡 明莉 (西溪校)
- 3位 藤井 朝日 (西溪校)



## 【3年生の部】

- 1位 藤森 彩美 (東部校)
- 2位 石川 伊織 (西溪校)
- 3位 黒岩 美月 (西溪校)

## 【4年生の部】

- 1位 諸岡 蒼翔 (西溪校)
- 2位 野田 美希 (東部校)
- 3位 石橋 春紀 (西溪校)

## 【6年生の部】

- 1位 佩川 智紀 (東部校)
- 2位 栗原 大実 (西溪校)

## 【7年生の部】

- 1位 村川 茜 (東部校)
- 2位 藤森 美緒 (東部校)
- 3位 松尾 美実 (中央校)

## 【8年生の部】

- 1位 宗田 麗来 (東部校)
- 2位 西山 咲希 (中央校)
- 3位 菅井 帆純 (東部校)

## 【9年生の部】

- 1位 西山 柚咲 (中央校)

## 【一般の部】

- 1位 上瀧 由依・早田 さら (チーム上瀧・早田)
- 2位 田中 里佳・横尾 賢 (チーム田中・横尾)
- 3位 太田 誉人・荒谷 聖也 (チーム太田・荒谷)



## 「縁起米」の奉納式

11月21日(金)、多久市内にある(株)JA食糧様が、多久聖廟に祀る孔子様へ「縁起米」を奉納されました。

奉納された米は、「合格びより」「合格の夢」「合格の光」と名付けられ、使っている佐賀県産米は、食味ランキング特Aを16年連続して獲得した「さがびより」、3年連続特Aの「夢しずく」、味わい深い「ヒノヒカリ」の3種類。それぞれ佐賀県を代表するお米です。パッケージには多久聖廟の写真がプリントされ、学業上達への心得を教える論語がそれぞれ書かれています。

奉納式には、JA食糧様がや公益財団法人孔子の里の関係者が出席。多久聖廟で春と秋に行われている稲葉の儀式にならない、廟内に安置されている孔子像に厳かに奉納しました。

「縁起米」は、高校受験を控える市内の義務教育学校の9年生へ学業成就・合格祈願として多久市へ寄贈いただきました。市では9年生を対象に学校給食で提供される予定となっています。

同社は、「縁起米」を通じて同市の地域発信に繋げることを目的とし、学問などをがんばる人を応援する贈答用などとして、幅広く味わってもらいたいとのこと。「縁起米」は、多久聖廟の参道入り口にある多久市物産館「朋来庵」でも販売されています。



## 草場佩川の『山野一善』(其の四)

佐賀大学 教授 中尾友香梨

本誌第17号に続き、草場佩川の『山野一善』に記された多久領主とその子らの逸話を紹介する。原文は、現在確認できる三冊の『山野一善』(県図本・尾形本・草稿)を照合して定めた。

○蘭山君、寛裕仁厚、君人之度可観。有病早就菟裘。無論声色、世間事一無所好着。此其徳之可貴者。何更挙一隅。

蘭山君、寛裕仁厚にして、君人(君主)の度(度量)、観るべし。病有りて早く菟裘(隠居)に就く。声色(音楽や色事)を論ずる無く、世間の事は一として好着する所無し。此れ其の徳の貴ぶべきものなり。何ぞ更に一隅を挙げん。

(大意) 蘭山君は、心が広く穏やかで、思いやりがあり、人の上に立つにあさわしい度量を備えていた。しかし、病のため早く隠居した。音楽や色事はいうまでもなく、世俗の事柄については何一つ好むものがなかった。これこそがその徳の尊ぶべき点である。さらに細かな例を挙げる必要があるか。

八代領主茂孝(一七五二〜一八一五)についての記事である。戒名は慈雲軒蘭山浄恵居士。七代領主茂堯の次男として生まれ、明和六年(一七六九)に父が亡くなると、十八歳で家督を継いだ。藩では杵島・松浦・彼杵の郡代をはじめ、文武方や御武具方、御小物成方などを歴任したが、家老職に就くことはなく、天明元年(一七八一)に三十歳で隠居した。

記事では隠居の理由を病氣としているが、その背景には、若い頃に経験したある事件が影を落としていたかもしれない。安永三年(一七七四)、小城藩は幕府から、有栖川宮織仁親王が勅使として江戸へ下向する際の御馳走役(接待役)を命じられた。ところが接待費の工面がつかず、幕府に拝借金を願ったことが「不心得」とされ、厳しい譴責を受ける。結果として、小城藩のみならず、佐賀本藩・蓮池藩・鹿島藩の藩主たちも自宅謹慎するという事態になった。責任を負った小城藩家老・野口文治郎は、文武方であった茂孝に身柄を預けられ、最終的に多久領萩野の富泉院において切腹を命じられた。藩内には文治郎に同情する声もあった。二十三歳の茂孝にとつて、重い経験であったに違いない。

佩川は続いて、茂孝の跡を継いだ茂郷について筆を進める。

○道桂君、有雅言曰、人唯於其所好惡而辟焉、有国儀、棋局、散樂、田獵等事、泊然無所繫累。可謂實踐之言矣。寛政初、与松原大夫共任藩政、康済艱難。当是時、白河侯立於幕朝、一匡旧弊、有十八公之称。君与公同庚、邦人服其英妙。

道桂君、雅言有りて曰く、「人は唯だ其の好惡する所に於いて辟る。国有り家有る者は、能く自ら知りて之を改むれば、則ち庶幾し」と。声色、茶儀、棋局、散樂、田獵等の事を論ずる無く、

泊然として繫累する所無し。実践の言と謂つべし。寛政の初め、松原大夫と共に藩政を任い、艱難を康済す。是の時に当たり、白河侯(松平定信)、幕朝に立ち、旧弊を一匡して、十八公の称有り。君は公と同庚にして、邦人、其の英妙に服す。

(大意) 道桂君は、いつも次のように語っていたという。「人間は自分の好き嫌いのところで心が偏ってしまふ。国や家を治める者は、それを自覚して改めれば、理想に近づくことができる」。そして音楽や色事、茶の湯、碁、猿楽、狩猟などを問わず、享楽や遊芸には淡泊で、心をとらわれることがなかった。まさに自らの言葉を実践した人物と言える。寛政の初め、松原氏とともに藩政を担い、困難な局面を立て直した。当時、幕府では松平定信が発用され、旧弊を正して、「十八公」と称えられていた。道桂君は定信公と同年の生まれであり、佐賀の人々はそのすぐれた才知に感服した。

九代領主茂郷(一七五九〜一八二七)に関する記事である。戒名は慈昭院道桂良覚居士。文中の松原大夫は未詳。「十八公」とは、「松」の字が「十八+公」から成ることにちなみ、松平定信の人格を松にとえた称である。

茂郷は宝暦九年(一七五九)十月、七代領主茂堯の三男として生まれた。兄茂孝の養子となり、天明元年(一七八一)に二十三歳で家督を継いだ。それから寛政二年(一七九〇)までの十年間、請役家老を務める。八代藩主・鍋島治茂のもとで進められた藩政改革において、茂郷の果たした役割は大きかった。そのため人々は、幕政改革を主導した松平定信を引き合いに出し、その才知を称えたのであろう。

もつとも、定信は宝暦八年（一七五八）十二月二十七日生まれであり、実際には茂鄰より一歳年長である。「同庚」とは、当時の感覚では必ずしも厳密な同齡ではなく、「同世代」という意味で解されよう。『山野一善』に記された次の人物は、茂孝と茂鄰の兄で、早世した兼連である。

○微笑軒君、年十三、初調海量公。公撫其背曰、我欲汝他日輔我後嗣、如管仲桓公。君退語人曰、孔子称管仲器小、而公以望於吾、何也。原五〔時為伴読〕曰、主君勿甚高論、孔子当称其功曰、微管仲、吾其被髮左衽矣、公其有取歟。君乃微笑。意欲論王霸之別、而不敢発。其卓識洪量概如此。不幸而短折〔宝暦四年、十四〕。時武邑胄子〔称藤太郎〕、与君同齡、斉声誉、又相尋卒。時有棟梁並壞之嘆。

微笑軒君、年十三にして、初めて海量公に謁す。公、其の背を撫でて曰く、「我、汝に他日、我が後嗣を輔くること、管仲の桓公を相くるが如くせんことを欲す」と。君、退きて人に語りて曰く、「孔子は管仲を器小なりと称す。而るに公、以て吾れに望むは、何ぞや」と。原五〔時に伴読たり〕曰く、「主君は甚だしくは高論すること勿れ。孔子、其の功を称するに当たりて曰く、管仲微かりせば、吾れ其れ髪を被りて衽を左にせんと。公、其れ取るどころ有るか」と。君、乃ち微笑す。意は王霸の別を論ぜんとして欲すれども、敢えて発せず。其の卓識洪量、概ね此くの如し。不幸にして短折す〔宝暦四年、十四〕。時に武邑の胄子〔藤太郎と称す〕、君と同齡にして、声譽を斉しくし、又た相い尋いで卒す。時に棟梁並びに壞るるの嘆き有り。

（大意）微笑軒君は、十三歳のとき、初めて海量公（五代藩主・鍋島宗茂）に拝謁した。公はその背をなでて言った。「お前には将来、わが後継ぎを助けてもらいたい。管仲が桓公を補佐したようにね」。君は退出してから人に語った。「孔子は管仲を器が小さいと言った。それなのに殿が、管仲を引き合いに出して私に期待するとは、どういうことだろうか」。すると、伴読（学問の供をする人）の原五が言った。「若殿様はあまりにも高遠な議論をなさらないでください。孔子はまた、管仲の功績を称えて、『もし管仲がいなかったら、我々は髪を振り乱し、着物の衽を左前にする異民族の風習に従っていたらどうしよう』とも言っています。殿もさっと、その点を評価しておられるでしょう。君は微笑んだ。本心では王道と霸道の違いを論じたかったが、あえて口にしなかったのである。その卓越した見識と大きな度量は、およそこのようなものであった。しかし不幸にも、宝暦四年（一七五四）に十四歳で早世した。そのころ、武雄鍋島家の嫡子藤太郎も君と同齡で、同じく名声が高かったが、二人は相次いで亡くなった。当時、人々は「国を支える棟と梁が、ともに失われた」と嘆いたという。

多久兼連（一七四一〜一七五四）は、七代領主茂堯の長男として生まれた。戒名は微笑軒聯山流芳である。「孔子は管仲を器小なりと称す」とは、『論語』八佾篇の語に基づく。管仲は春秋時代、斉の桓公を補佐して覇者（諸侯の盟主）となした名宰相である。その管仲を孔子が、器が小さいと評したのは、徳によつて主君を王道政治へ導くには至らなかったからである。

一方、「管仲微かりせば、吾れ其れ髪を被りて衽

を左にせん」とは、『論語』憲問篇の言葉である。管仲の働きによつて、中原は異民族の支配を免れたという意味である。孔子は管仲の徳の不足を批判しつつ、歴史的功績は高く評価したのである。

兼連はこの二面性を踏まえて、王道と霸道の区別を論じたかったのであろう。王道は徳による政治であり、霸道は力と制度による統治である。十三歳にしてすでにその差異を意識していたことは、注目に値する。ただしその議論は、海量公を批判することにもなりかねず、原五は機転を利かせて話題を収めたのである。

原五（一七一九〜一七六九）、字は士岳、または大来、通称は五太夫。花祭と号す。多久花祭村の出身で、父は東原庫舎の祭酒（校長）を務めた原浄忠である。兼連の没後、京都へ遊学し、帰郷して東原庫舎の教授となった。

以上、『山野一善』に記された多久家の兄弟三人の逸話を紹介した。蘭山君の無欲恬淡、道桂君のすぐれた才知、そして微笑軒君の早熟な識見。徳・才・識という三様の資質を、佩川は見事に描き分けている。簡潔な筆致の背後には、地方支配を担った多久家の精神史が静かに刻まれている。

（つづく）

【参考文献】

『多久市史』第二卷（近世編）、二〇〇二年。



# 石井鶴山が詠んだ殺生石と黒塚

熊本大学 教授 中尾健一郎

多久が生んだ石井鶴山(字は仲車)は、江戸時代中期に佐賀藩儒として活躍した人物である。彼は安永四年(一七七五)に、佐賀藩八代藩主・鍋島治茂に侍読として召し抱えられ、天明元年(一七八一)に藩校弘道館の助教となった。弘道館で藩士の教育に携わる一方で、日本各地を旅して、多くの紀行詩を遺した。最初に紀行詩巻としてまとめられたものに「奥羽紀行」がある。鶴山が安永四年の秋、東北

地方を巡った際に詠作した詩を収める。この詩巻の中の和歌をふまえた特徴的な作品については、別に論考(1)にまとめたが、本稿ではこれにふれなかった「殺生石」と「黒塚」を詠んだ詩を紹介しよう。いずれも、当時の伝承を反映させた興味深い作品である。なお、詩の原文は、「石井鶴山先生遺稿」(公益財団法人孔子の里、二〇二一年)に拠り、作品番号を附す。

## 那須原

玉妃承寵入清都 玉妃寵を承けて清都に入る  
 一夜妖光射帝軀 一夜妖光帝軀を射る  
 壮士応詔驅鉄騎 壮士詔に應じて鉄騎を駆り  
 平原較獵驚神狐 平原に較い獵りて神狐を驚す  
 陰雲慘淡飛禽下 陰雲慘淡として飛禽下り  
 殺氣憑陵片石孤 殺氣陵に憑りて片石孤なり  
 索莫空攀碑碣読 索莫たるに空しく碑碣に攀じりて読めば

## 毛州覽古此模糊

毛州覽古此れ模糊なり

(「石井鶴山先生遺稿」, 作品番号429)

鶴山は江戸を出発して、下野国(現在の栃木県)

の那須野ヶ原を通った。その際、妖怪である狐が化けたとされる玉藻の前の遺跡に立ち寄った。いわゆる「殺生石」である。

玉藻の前については、『御伽草子』や能の『殺生石』に見える。平安時代、鳥羽上皇の時代に玉藻の前という女性が宮中に入り寵愛を受けた。しばらくして上皇が病の床に臥し、玉体を損なっている原因が玉藻の前であることが発覚した。正体を見破られた妖狐は宮中から逃げ出したが、逃亡先の那須野ヶ原で追っ手の武士たちに射止められて石と化した。この石に近づく生き物は石の毒氣にあたって死んだため、これを殺生石と称するようになったとされる。

詩の内容は、妖狐の生前と死後で前半と後半に分けられる。これを二句ずつ解説しよう。首聯は玉藻の前の都入りと、上皇が彼女の妖氣により病を得たことをいう。頷聯は玉藻の前を誅殺する詔を受けた武士たち、具体的には三浦義明、千葉常胤、上総広常が那須野ヶ原で妖狐を追いつめて射殺したことを描写する。頸聯で詠まれているのは、殺生石の様子である。薄暗い雲が垂れこめる那須野ヶ原では、飛ぶ鳥も地に落ちる。それは当地の岡にはポツンと立つ殺生石から毒氣が噴き出ているからである。尾聯は此処を訪ねた鶴山の行為である。荒涼たる原野にてその岡に登り、殺生石の近くに立てられた石碑に刻まれた文を読んで往事を偲ぼうとしたが、文字は

摩滅して、殆ど読めなくなっていたと結ばれる。最終句の「毛州」とは、「上野国」と「下野国」の総称で、ここでは那須野ヶ原がある下野国の異称。

「覽古」は李白の「蘇台覽古」越中覽古」などの詩題に用いられる語で、遺跡にて懐古することをいう。鶴山は那須野ヶ原の殺生石とその傍らに建てられた石碑を見て、九尾の狐とこれを追いつめた武士たちの姿を想像したのであろう。なお、石碑については未詳である。

ところで、那須野ヶ原の殺生石は、元禄二年(一六八九)に芭蕉も訪れており、『おくのほそ道』(2)に次のように記されている。  
 ひとひ郊外に追遣して、犬追もの、跡を一見し、  
 那すの篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとぶ。(中略) 殺生石は、温泉の出る山陰にあり。石の毒氣  
 いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、真砂の色の見え  
 めほど、かさなり死す。

芭蕉は那須野ヶ原がかつて犬追物が行われる場であったことを示して、武士たちが妖狐を追いつめたことを連想させる。また、殺生石の毒氣にあたって死んだ蜂や蝶の死骸が地面を覆っていると述べる。「おくのほそ道」には見えないが、『曾良随行日記』四月十九日の条には、「石の香や夏草赤く露あつし」(3)の句が記されている。硫黄臭が漂う当地では、温泉のために夏草が枯れて赤くなっていることが詠まれているが、殺生石とその毒氣、および草を染めた妖狐の血潮を連想させる疑ったつくりとなっている。鶴山が玉藻の前と鳥羽上皇の故事、武士たちの狐狩り、殺生石とその毒氣のことを流れるように書きつらね、往事を懐古することを詠んで余韻を残すのと異なり、芭蕉は妖狐の故事を抽象化し、一句の中に凝集させている。両者の詠みぶりは対照的で、

はなはだ面白い。漢詩と俳句のジャンルの違いはあっても、同じ題材から鶴山と芭蕉の個性の違いが見て取れる。

那須野ヶ原を通り抜けた鶴山は、奥州街道を北上

して陸奥国に入り、安達ヶ原の黒塚に至った。黒塚とは、今の福島県二本松市の真弓山観世寺に現存する遺跡である。鬼婆の墓と伝えられ、謡曲の演目「黒塚」（「安達原」とも）としても知られる。これは「鬼女物」に分類されるもので、「安達ヶ原の鬼婆」を主題とする。鶴山がいかなる媒体に基づいて創作をおこなったかは不明であるが、詩の内容を理解しやすくするために、読解に先んじて謡曲「黒塚」から鬼婆説話を紹介しよう(4)。

熊野の那智の祐慶阿闍梨ら山伏の一行は、廻国修行の折り、安達ヶ原で一夜の宿を探した。たまたま一軒の庵を見つけ、住人である老婆に宿を貸してもらったことになった。寝床に就く間際、老婆は薪を取りに出かけるが、自分の寝所を覗かないようにと約束させた。祐慶は承諾したが、寝付けなかったお供の者が老婆の寝所を覗き、白骨化・腐肉化した死体がうずたかく積まれているのを目撃してしまう。お供の者の注進を受けた祐慶は、老婆の正体が噂に聞く安達ヶ原の鬼婆であることに気づき、一行を引き連れて逃げ出した。祐慶一行が逃げ出したことに気づいた鬼婆は、祐慶らが約束に背いたことを語り、鉄の杖を振り回して追いかけてきた。そこで祐慶たちは五大明王の真言を唱えて祈り、遂に鬼婆を調伏する。力を失った鬼婆は、正体が露見したことを恥じながら、嵐の吹く闇の中に消えていった。以上を一部ふまえて、鶴山の詩を読み解こう。

安達原

黒塚上、安観音大士。

黒塚の上、観音大士を安んず。

安達原頭四望平 安達原の頭四もに望めば平

翠磐中築老婆城 翠磐の中に築く老婆の城

野花猶見朱唇色 野花猶お見す朱唇の色

塞草空留黒塚名 塞草空しく留む黒塚の名  
行路寒心扛鼎力 行路寒心せしむ扛鼎の力  
機縁崩角誦経声 機縁崩角せしむ誦経の声  
即今翻現補陀界 即今翻りて現す補陀の界  
日夜潮音樹裡鳴 日夜潮音樹の裡に鳴る

(「石井鶴山先生遺稿」、作品番号435)

詩の題注に見える「観音大士」とは、黒塚の傍らに安置された観音菩薩像を指す。芭蕉と曾良も当地に立ち寄っており、『曾良随行日記』五月一日の条に次のように記されている。

供中ノ渡ト云テ、アブクマヲ越舟渡し有り。その向ニ黒塚有。小キ塚ニ杉植テ有。又、近所ニ観音堂有。大岩石タ、ミ上ゲタル所、後ニ有。古ノ黒塚ハこれならん、右ノ杉植し所は鬼ヲウツメシ所成らん、卜別当坊申ス。

阿武隈川の供中の渡しの対岸に黒塚はあった。小さな塚の傍らに杉が植えてあり、その近辺に観音堂が建てられていた。鶴山が言う観音はこれである。該詩の首聯から順に解説しよう。安達ヶ原は一面の平野である。そこに濃い青色の大岩があり、かつては岩の中に鬼婆の住み家が築かれていたとされる。曾良の日記に「大岩石タ、ミ上ゲタル所」とあるのと同じである。頷聯には黒塚とその周辺を詠む。名も知れぬ赤い花は、人肉を喰らった鬼婆の唇を連想させるが、今は辺境の草の間に黒塚と呼ばれる鬼婆の墓があるだけだ。頸聯では一転して往事の山伏と鬼婆の対決が描かれる。鉄の杖を振り上げて追いかけてくる鬼婆は、逃げる祐慶らの心胆を寒からしめた。だが、祐慶をはじめ山伏たちが唱える読経の声に、鬼婆はどうとう屈服し、仏門に降ったという。

附言すると「扛鼎」は金属製の鼎を持ち上げるほどの怪力、「機縁」は仏縁、「崩角」は頭を地につけることで、ここでは鬼婆が読経の力に屈して頷れたこと

とをいう。尾聯では、鬼婆が仏門に入ると突如としてそこに観音菩薩の補陀洛世界が出現したとする。そして鬼婆の亡き後、この地には観世寺が建てられ、黒塚の傍らに植えられた杉の木は日夜、観音菩薩がおられる南海の補陀洛山に打ち寄せる波の音を聞かせてくれると詠み収められる。かつては鬼婆であった者も、黒塚の下で安らかに眠っていることだろう。ところで、鬼婆説話の黒塚は、「陸奥の安達原の黒塚に鬼こもり」と聞くはまことか(5)。「拾遺和歌集」巻九・雑下」という和歌に詠まれた歌枕でもある。この歌は、平安時代に平兼盛が、源重之の姉妹が黒塚に大勢住んでいると聞いて詠み贈り、戯れに重之の妹を「鬼」に喩えたものである。以前拙稿に論じたように、鶴山は和歌に着想を得て漢詩を詠むことができる詩人であった。当然、この和歌も知っていたであろう。しかし、「安達原」では和歌にはあえて言及しない。黒塚の遺跡や観音菩薩像を前にして、鶴山は和歌よりも鬼婆と山伏たちの戦いに思いをよせ、かの地に立つ杉の木が風に枝を鳴らす音に耳を澄ませたのである。

【注】

- (1) 中尾健一郎・中尾友香梨「石井鶴山の「奥羽紀行」—歌枕での詠作を中心に—(熊本大学教育学部紀要)第七四号、二〇二五年)
- (2) 本文は上野洋三・櫻井武次郎校注『芭蕉自筆奥の細道』(岩波文庫、二〇一七年)に拠る。
- (3) 『曾良随行日記』の本文は、頼原退蔵、尾形仿訳注『新訂おくのほそ道—附現代語訳—曾良随行日記』(角川日本古典文庫、一九六七年)に拠る。以下同じ。
- (4) 謡曲「黒塚」の内容については、小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『謡曲集(2)』(新編日本古典文学全集59、小学館、一九九八年)に拠る。
- (5) 本文は小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(新日本古典文学大系7、岩波書店、一九九〇年)に拠る。

# 日本磁器の開発と展開

―特別企画展「初期伊万里ビッグバン」でたどる草創期の磁器生産―

佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員 巖 由季子

日本初の磁器は十七世紀前半の肥前で誕生した。

開発成功から数十年の間に生産された製品は初期伊万里と呼ばれる。すでに肥前で作られていた陶器の窯で磁器も併焼することで始まり、朝鮮半島からもたらされた窯業技術を基盤としながら中国風の染付磁器を生産する新たな産業として急成長を遂げた。

近年の研究により、有田で突如として磁器生産が始まったのではなく、多久や伊万里で技術開発が行われていたことが明らかになってきた。二〇二五年に開館四十五周年を迎える佐賀県立九州陶磁文化館が開催した特別企画展『初期伊万里ビッグバン―日本磁器始まりの全貌―』は最新の研究成果に基づき、伝世の優品と窯跡出土資料を通して磁器生産草創期の展開を紹介した。

本展冒頭には多久・高麗谷窯跡出土の白磁片を展示した(図)。一五九〇―一六一〇年代頃に操業したと推測される高麗谷窯跡は絵唐津の大皿や杵茶碗など陶器を生産した窯として知られるが、少量ながら磁器製品と磁器焼成に用いるサヤ(匣鉢)が出土する。二〇二〇年に多久市郷土資料館で行われた「高麗谷窯跡」展で紹介され、有田に先行して多久で磁器焼成を試みていたことが知られることとなった。本資料の白く薄い器胎や、丁寧な造りの高い高台は朝鮮半島の白磁を思わせる。しかし、砂床もしくは

窯道具と思われるものと熔着していること、さらに朝鮮半島に例がなく肥前陶器に見られるモミガラ痕が高台側面に熔着することから、肥前で生産されたことが明らかである。また、多久の唐人古場窯跡では磁器生産を行っていないものの、朝鮮半島の陶磁器生産と共通した特徴のある窯として注目される(註)。

陶祖として知られる初代金ヶ江三兵衛が朝鮮半島から日本に渡った後、多久安順(たくとし)に召し抱えられ数年間逗留し、元和二年(一六一六年)と考えられる丙辰之年に有田に移動したことは三兵衛が多久家に提出した覚「皿山金ヶ江三兵衛高麗より罷越候書立」に記される。本展では従来知られる文献史料をベースに出土資料によって得られた情報を加えることにより、朝鮮半島出身の窯業技術者が多久で磁器生産を試み、製陶技術を持って有田に移住し肥前磁器生産に大きな影響を与えたとする歴史認識の実証を試みた。

高麗谷窯跡では磁器生産関連の出土資料が少なく、白磁や青磁がわずかに認められるのみであるため、あくまで試作段階であったとみられる。染付磁器は伊万里の鞍壺窯跡において認められ、窯業技術者が伊万里に移動した可能性が考えられる。しかし、伊万里における磁器生産関連資料も本格的な磁器生

産が開始された有田に比べるとごくわずかである。

有田は三兵衛の移住とともに発展したと思われ、初期の中心的な窯場とみられる小溝上窯跡や天神森窯跡などから多量の染付磁器片が出土した。当時の日本市場は中国で生産された染付磁器を求めたため、朝鮮半島の窯業技術を基盤にしながらも中国の染付磁器を模倣した製品を作ろうとしたのである。染付による装飾は中国風だが、朝鮮半島の白磁に見られる皿の縁を折る器形や窯道具などに朝鮮半島の窯業技術の影響をみることができる。

泉山陶石の開発と寛永十四年(一六三七年)の佐賀藩による窯場の統廃合を経て、資源・技術・人材を磁器生産に集中する仕組みが完成したことにより磁器の生産量は爆発的に増加した。十七世紀前半の磁器生産は国内市場への磁器の供給を目的としたため、製品である初期伊万里には当時の日本の流行を見ることができ、初期伊万里の伝世品の多くは直径二〇cmに満たない小皿類だが、なかには直径四〇cm以上の大皿もある。当時の日本では宴のための大皿の需要があり、十六世紀末から肥前の陶器(唐津焼)で国内向けの大皿が生産されたことを背景に初期伊万里でも大皿生産が行われた。小溝上窯跡をはじめとする有田の草創期の窯でも大皿が見られるが、一六三〇―一六四〇年代に生産量が増加し、山辺田窯跡などにおける出土例があり、底部に三足を付けた大鉢(染付竹虎文大鉢)東京国立博物館所蔵)をはじめとする貴重な伝世例も知られる。また、香炉や香合など皿以外の器種も生産され、注文者の存在をうかがわせるような少量多品種の製品が見られる。大皿に施された文様の力強さや、小さな香合に

見る繊細な造形などそれぞれに異なる魅力があり、中国磁器を目指しながら試行錯誤し、国内のさまざまな需要に応えようとした様子をうかがい知ることが出来る。

一六四〇年代以降に中国系の技術を新たに導入して飛躍的な革新を遂げたことで初期伊万里の時代は終焉を迎えた。生産効率化を求める過程で手間のかかる技法などは見られなくなり、中国磁器の品質に迫る製品が大量に生み出され、世界に向けて輸出されていく。

窯跡の発掘資料や同時代の文献史料を骨子に構成した本展は、日本の磁器生産草創期の展開に関する近年の研究成果を広く紹介する機会になった。

註 多久のやきもの生産については本誌第十七号に詳しい。大橋康二二〇二五「江戸時代、多久のやきもの生産―肥前陶磁器の歴史の中で、多久のやきもの生産はどのような役割を果たしたか―」『鶴山書院報』第十七号、公益財団法人孔子の里

図 (右)『初期伊万里ビッグバン』展示風景  
(左)〈白磁碗〉肥前高麗谷窯 一六〇〇～一六二〇年代 多久市教育委員会所蔵



## 令和8年

### 多久聖廟春季枳菜のご案内

日時 令和8年4月18日(土)

場所 多久聖廟

- ① 10時～10時20分 執事・伶人 入場
- ② 10時20分～10時30分 献官・祭官 入場
- ③ 10時30分～11時30分 枳菜(せきさい)
- ④ 11時30分～ 枳菜の舞、参列生徒の唱歌、楊琴の調べ、孔子の里腰鼓



# 草場船山「蟋蟀之吟」

(翻刻文紹介 其二・完)

草場佩川の会事務局 石丸 隆司

○夫文武ハ車ノ両輪ノ如シトハ馭レ世ヲ言ニシテ一人ニ求ル所ニアラス一掣

牛ハ不レ能ハレ捕レ胤ヲ鶴脛ハ長ク鳧脚ハ短シ大小相兼ル能ハス長短分定ルハ天ノ数ナレハ獨リ人ニ於テ並備フルヲ得ンヤ此聖人ノ所以テ無レ求レ備レ於一人ナリ今ヤ文武ノ課程ヲ設ケ家中ノ士ヲ一般ニ熟達セシメント欲スル不レ亦難カラ一乎而メ其不レ能者ハ加ルニ嚴罰ヲ以テ預メ其條ヲ揭示ス其意ニ曰ク勇凌クモニ責育ヲ一口詩音ヲ誦スル能ハサレハ不レ得レ齒士ニ文駕ニ班馬ニ毛手一條槍ヲ執ルヲ得サレハ削祿秩ト不レ亦苛一乎杜元凱射テ札ヲ穿ツ能ハサレトモ陣中ニ在テ左氏ヲ注シ文名千古ニ耀ケリ李光弼不學ノ譏ヲ免カレサレトモ用レ兵ヲ萬世ニ冠タリ蓋人各有レ能有レ不能一其所能ヲ用ヒテ國家ノ翰屏ニ供セハ士ノ能事終レリ必シモ術ノ多端ニ涉ラス但其才カ有レ餘者多ク學フモ莫レ不レ可ナリ人有レ恒言一曰大藩ニテ家士モ多ケレハ各一藝一術ヲ專ラニサセルモヨケレトモ小家中ニ在テハ行ハレ難シト此レ大ニ不レ能ニ似タリ如何トナレハ大藩ハ必ス祿秩モ大ク游於藝ノ暇モ多ケレハ成丈多藝ニ涉リテモ修熟ヲ得ヘシ小家中ハ祿少ク暇モ乏シケレハ迫モ多藝ヲ修得ルコト難シ夫蠶ハ尾ヲ以刺シ蝸ハ口ヲ以テ嚙ミ各ク能ク人ヲ毒スルコトナレバ士トシテハ何ソ一能ノ國家ノ防キニ成ルヘキアラハ事足ルヘシ故ニ貧困ノ士ハ文武ノ間一術ノ課ヲ遂ケ得ハ劔ニテモヨシ槍ニテモヨシ弓馬モヨシ銃礮モヨシタタ其志ノ所向其身ノ所適ノママナ

リ但此ヨリ以上不レ厭多ヲ唯欲スレ熟セシヤ五穀ノ美ナルモ不熟サレハ不レ如ニ穉穉ニト云詛ニテ貧農トシテ過分ノ田畠ヲ受持テモ何分耘耔ノ手ガ廻リ兼ヌレハ秋ノ實ノリカ覺東ナシ寧ロ其身ニ應シタル程計レ而耕ス方ヨカルヘシ夫苟モ一藝ノ取ルニ足ル者アラハ之ニ為上ニ者能ク用レ之良工ノ材ヲ采ルカ如ク大木ハ為レ梁ト細木ハ為レ椽トハ其用ヲ成ササルハナシ要在養ニ其廉耻名節之心ヲ而已

里巷ノ小民モ使レ知レ有ルニ教化一士人ノ選舉ハ宜由ニ于廷試ニ

○我邑士ヲ造ルノコトハ先君ノ遺法存スレト小民ヲシテ道ニ由リ善ニ向ハシムルヲ教ルノ事未タ聞カス農官タル者冬月ノ比教諭ト稱シ村里ヲ廻ルコトアレトモ條目ヲ讀聞ス迄ニテ毎年ノ定例ヲ存スルノミ吏人ノ專務トスル処租稅ヲ促カシ築作ヲ修メ訴訟ヲ決スルノミニテ曾テ風化ノ筋ニ心ヲ用ルコトナシユエニ民トシテ親カ力切ナルカ兄弟ノ睦マレカルヘキカ長上ヲ敬フヘキカ力役ノ事ハ當キ務ムカ辨ヘサレハ風俗ノ日ニ不善ニ趨ムク亦宜ヘナリ昔者水戸ノ黃門公ノ代ニ親ヲ殺シタル者アリ死罪ニ處セラルルニ決シソノ者ヘソノ状ヲ達セラレケレハソノ者申ケレハ私ハ自分ノ親ヲ自分カ殺シタルコトニテ決シテ不調法トハ心得ストテ何分承伏セサリケレハ其段ヲ公ヘ達シケレハ公ノ仰ニソレハ姑ラク學問ヲサスヘシトテ直ニ澁井太室翁ノ處ヘ寄宿セシメ朝夕人倫ノ道ヲ説テ聞セケレハ三年目ニハ自分ヨリ獄ヘ走り込ミ初テ親ヲ殺シタル大罪タルヲ承知致シタレハ何トソ早ク殺シテ賜ハルヘシトテ遂ニ死罪ニ行ハレタリト此アマリ人情不通ノコトノ様ニモ見ユレトモ愚民ノ極ニテハ實ニ父兄骨肉ノ太切ナルコトヲ過ト合点出来ヌソノユヘ不善ニ陥ルコトモ多ケレハ民ノ父母タル者豈ニ忍然トシテ視ルニ忍ヒンヤ

チソノ遺憲ナラン吾邑廷試ノ事春秋兩度ニ行ハルレト亦唯藝ヲ一場ニ觀ルマテニテ必スシモ其能者ヲ擧ケ官ニ用ユルト云コトモナク又藝ヲ賞シ勸ルコトモナク但年ニ一度學職ヨリ帳簿ヲ以テソノ稽古ノ度數ヲ上マツルヲ見テヤ、勸懲ヲ為スノミイマタ人ヲ誘掖スルニ足ラサルナリ何トソ兩度ノ廷試ニ其藝術ノ巧拙ヲ一場ノ觀トナサシメス其藝ヲ觀テ其行ヲ察シ善ナラハ則擧ケレ之ヲ此レカ階梯ヲナサハ文武ノ道モ自然ト繁昌シ人オモ出ルヘシ抑古人廷試ノ法ヲ設ケタル趣意ハヤハリ此ニテ選舉ノ階梯トナシタルモノナルガ年月ヲ歷テ唯ニ定例トナツテ實用セサルコトナリ何事ニ由ラス古人ノ成法ノ弛ミタルヲ張サヘスレハ必スシモ新ニ條令ヲ煩シフスルヲ不レ用サルナリ

### 賞罰失レ機 淫褻成レ風

○國家ノ大権ハ賞罰ノ二ツニ係レリ二ツノ者機宜ヲ得サレハ賞千金ヲ費シテ人善ニ勸マス罰牛毛ノ如クシテ民不善ヲ改メス蓋賞ト罰ト皆少キヲ欲ス多キヲ不レ好ムレハ必ス濫ナリ濫ナレハ人必ス輕ニス賞ノ善ヲ勸ムルハ植物ヲ養フカ如シ其將崩レト及ンテ沛然タル時雨ヲ得レハ一齊ニ發生スモシ時トナク度々降レハ却テ害トナル罰ノ惡ヲ懲スハ疾雷ノ不レ追レ掩レニ耳カ如クシテソノ震擊無レ定リ故ニ人懼レサルナシモ日々夜々ニ殷々トシテ震擊定處アラハ其誰カ此ヲ懼レン苟モ用レ罰煩碎ニシテ多キニ過ル寸ハ人々狎侮ルアツテ何ノ罪ハ何ノ罰ヲ蒙フルト預スル心アリ且用レ罰多ケレハ斷獄必ス滯ル滯レハ必ス姦計ヲ生ス故ニ賞罰ノ事少キニ若クハナシ要ハ在レ得ニ其機宜ヲ而已

○淫褻ノ欲ヲ逞フスル必ス便儂巧媚ノ人ニアリ抑英雄好レ色ト云フモアツテ古來往々此病ヲ免レサル人モ多ケレトモ亦唯其氣ノ磅礴スル処此ヲ借テ之ヲ洩スノミ尋常人ノ惑溺シテ返ルヲ知ラサルニハ大ニ異ナリ此唯色ノミナラス酒ニ至モ亦其磊落ノ氣ヲ遺ルニ過ス所謂寓ニ于此一ノミ我邦世祿成レ俗士太夫太平ノ化ニ浴

シ安佚ニ生長シ飲酒宴會率子虚日ナケレハ淫褻ノコト  
必ス其間ニ行ハル甚シキニ至テハ父兄骨肉ト雖トモ深  
ク耻ルヲ知ラスサテ其弊風自然ト下民ニ及ヒ人ノ女ヲ  
竊ミ他ノ妻ヲ奪フモ亦怪マス在レ上者聞レ之モ亦一場ノ  
笑墮トスルマテニテ曾テ倫理風俗ノ傷シヲ歎スルニ至  
ラス名教ノ衰ヘ噫亦極リヌサテ便儂巧媚ノ人ハ獨婦女  
子ニ悦ハル、ノミナラス貴人必ス此ヲ情フテ遊宴ノ欲  
ヲ佐ケ一日モ不レ可レ無レ此君一ト云程ニ寵ヲ得ルアリ噫  
便儂巧媚ノ人獲ラレテ廉耻名節ノ士隠ル可レ不レ深  
畏レ哉

恃ムハレ人ヲ豈若シヤレ恃ムニ己ヲ責ハレ下ヲ瀆シ先ツ責  
上

凡ソ国家ノ用九分シテ其三ヲ兵ニ用ヒ其三ヲ平日ノ費  
ニ用ヒ其三ヲ儲蓄ニ給ス此一定ノ法ナリ夫今時諸侯能  
ク量入レ為レ出ノ道ヲ守ル幾人カアル抑上下貴賤其分ヲ  
知ラサルカ奢ノ本トナルコトニテ昔百萬石ノ國ニテ今  
十萬石ナラハヤハリ十萬石ニテ其費用ヲ済スカ當然ナ  
レトモ多クハ旧来ノ家格ニ拘リ曾テ其形ヲ更ユルヲ欲  
セス加レ之ニ太平華靡ノ風日愈甚キヲ以シテ其國イカ  
テ困窮ニ至ラサランヤ鷹山公ノ先封百二十萬石ナリシ  
カ三十萬石ニ減シ遂ニ二十五萬石トナル而シテ其家士古  
ニ少シモ減セ子ハ國計何レトモ運ヒ兼ケレハ公一旦奮  
然國レ治專ラ古格ヲ破リ新政ヲ發シ每事簡易ヲ本トシ  
節儉ヲ先ンシ所謂量入為出ノ法ヲ守リ俗吏小官迄モ  
能ク其意ヲ奉シ事ヲ行ヒケル爾時某侯ノ女子公ニ嫁セ  
ラル、ニ化粧料ト号シ三千金ヲ進メケレハ其掛リノ吏  
人悉ク受用イタシ邸ヘ帰り衆吏一同評議ノ上又々某邸  
ヘ往テ申ケルハ最前御患ミ預リタル金子莫大ノ義ニテ  
御志ノ程重疊奈クソ口然トモ後房ノ費用大凡千五百  
金ニ不過レハ残り千五百金ハ不用ナリトテ向方ヘ返シ  
ケルトナリ此專ラ眼前ノ利ニ眩ハス己レノ分ヲ執守リ  
タルト云ヘシモシソノ千五百金ヲ返サスシテ一旦奢ノ  
筋ニ用ヒタラハソレヨリシテ家ノ法モ墜落シ千五百金

ノ利遂ニ幾百萬ノ損失トナリヌヘシ世ノ所謂良臣ハ方  
便術計ヲ用ヒテモ君ヲ富シサヘスレハ善キコトト心得  
町人ニ首ヲ下ケ金ヲ借り新ニ物産等ヲ起シ商賈ノ利ヲ  
權シ或ハ租税ヲ増百姓ノ血ヲシホリテ經濟ヲ説クモノ  
滔々タリ此豈ニ為レ政ノ道ヲ知ル者トセンヤ國家ハ如  
レ此一時ノ利ヲ得一旦ノ急ヲ救ヒタル迄ニテ済ムヘキニ  
非ス殊ニ金銀融通シ物産モ能ク賣レルハ太平無事ノ日  
ノコトニテ万一國家有事ト云日ニナツテハ諸國各々  
ソノ用ヲ備フルコトナレハ通財ノ道塞リ又必非常ノ節  
儉ヲ行コト必然ナレハ物産モ賣レズ加レ之ニ田地水旱ノ  
災ヲ以テセハ其亦如レ之何ニセンヤ故ニ國ノ為レ國ハ己  
ノ納ル、処ノ高ニ由ツテ法制ヲ定メ儲蓄ヲナスニアリ  
然レトモ此庸君俗吏所謂ノ家格等ニ拘者ノ能シ得ルコ  
トニアラス苟モ拘ハツテ變スルヲ知ラスンハ遂ニ家格  
モ共ニ淪胥スルニ至ラサレハ止ス何ソソレ悟ラサルヤ  
○家中ニ示ス処ノ掟ニハ音物賄賂ハ堅ク停止ストノコ  
トニテ吏人ノ官事ヲ處スルニハ本藩ヘ願ヒノ筋或ハ隣  
境ニ對シ爭論ナトノ事アルニ當ツテハ往々音物ヲ厚シ  
屢々内話ヲ納シ容易ニ解ケ勝チ難キコトモ勝コトア  
リ此固ヨリ臣下ノ當レ盡コトナレトモ何卒解クヘキヲ  
解キ勝ツヘキヲ勝ツテ縱ヘ少々ノ損失ニナルトモヤハ  
リ自己ノ分ヲ百世執守リ他ノ宝ヲ羨ミ願ハストモ事足  
ルト云基本ヲ立テ大丈夫ノ家ニナシ度モノナリ殊ニ家  
中ニ示ス処ト官ノ行フ処ト違ヒテハ人心ノ習弊モ改ル  
マシク抑々君ノ金錢ヲ不惜シテ音物ヲ以テ難事ヲモ  
亨シ功利ヲモ成スコト大抵ノ人ナラハ出来ルヘシ必ス  
ヤ物ヲ費ヤサスシテ勝利ヲ得タキモノナリ近時小松侯  
近藤篤山翁ヲ尊礼シ大ニ其道ヲ慕ヒ学ヒケルニ適隣境  
ト田地ノ争ヒ起リ連年決セサレハ翁ヘ委子テ此ヲ断セ  
シム翁固辭スレトモ是非一己ノ處置ニ任スルトノコト  
故翁ノ謀ラヒニハ件ノ地面ハ全ク向方ヘ渡シ申ス間直  
ニ受取ラルヘシト眞實ニ申ケレハ向方大ヒニ迷惑シ衆  
吏叩頭シテ申ケレハ此争ヒニ於テハ元來我々非理ヲ云

募リタルコトニテ實ニ貴國ノ所領タルヘキ筋ナリトテ  
遂ニ小松ノ領ニナリタリト此誠ニ其人ノ德望信義ノ人  
ヲ感動スル処アルヲ以テナリ得ル人ヲ如レ是ナラハ豈  
事ノ可レ為ナカランヤ

凡ソ事易レ趨ニ便利ニ一何ノ費ガ不ラシ壞レニ于修飾ヨリ  
○人情便利ヲ好マサルハナシ苟モ便利ヲ好ム心除カサ  
レハ節儉ノコトモ必ス此ヨリ崩ル屋ハ茅ヨリ瓦カ便利  
土橋ヨリ石橋カ便利雪踏ハ草履ヨリ便利ト云コトニナ  
ル勢ナリ夫レ徒ニ便利ノ方ヨリ云ハ、所レ謂如レ利則  
枉レ尋直尺而利亦可レ為ト云ト同義ニテ連ノコトニ瓦ハ  
銅ニナスモヨカルヘシ殿射象着ノ奢リ遂ニ玉杯トナリ  
又瓊宮玉臺トナルハ勢ヒナリ上下貴賤皆此勢ニ趨リ易  
ク能ク悟ルナキナリ故ニ人君苟モ節儉ヲ示サント欲セ  
ハ即チ帝堯土階三尺ノ通り家居其外其身不相應ノ質朴  
ヲ用ヒ縦ヒ不便利ナリトトモ不顧レハ習風一新必ス大  
ナル便利ヲ得ヘシ兎角一旦ハ費テモ永末便利ト云コト  
ニ惑フナカルヘシ但田畠河筋ナトノコトハ費ヲ惜マス  
力ヲ盡シ百人ニテ済ムヘキハ二百人五百人八千人ト費  
ヤシテ永久ヲ謀ルヲ要トス此即チ大ヒ二人ヲ惜ムトコ  
ロナリ然レトモ此ヲスルニ其平日不急無用ノ筋二人ヲ  
費ヤスヲ深ク慎ニアリ

○古人云處ニ家事ヲ一如ニ官事ニ視ニ官物一如ニ私物ニ人情  
家事ニ於テハ鄙吝ノ心生シ易スク官ノ事ニハ必ス張出  
シ大抵官物ノ費ユルハ都合ノ二字ニ出ツ此ハ無キ據都  
合ナリ彼亦無據都合ナリ此節迄テハ無據都合ナリト不  
亦甚惜ナリ此所謂修邊幅ト云々過キサルノミサテ  
費レ物ノミ然ルニアラス土木ノコト益々繁ク旧貫ヲ  
改メ新功ヲ建テ觀美ヲ競ヒ其所レ用ルノ彼夫ハ諺ニ云ル  
公彼モノトテ一月ノ内半分ハ勤メヌ程ノコトニテ一日  
ノコトハ三日三日ノ事ハ五日トナリテ丁彼モ益々繁  
クナル勢ナリサテ丁彼ノコトハ尤モ慎ムヘキ義ナレハ  
古人ノ云ル如ク興ニ一利ヲ不レ若レ除ニ一害ニ一事ニ  
不レ若レ減ニ一事ト心得タシ

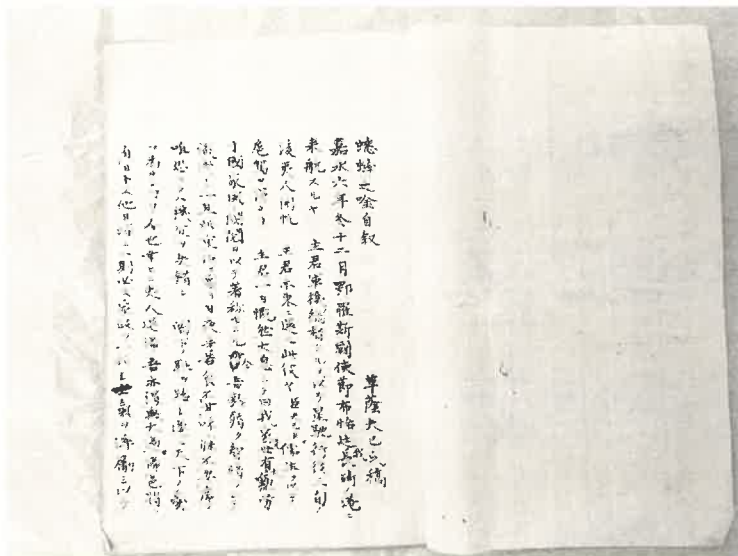
施<sup>レ</sup>恩渾厚<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>小臣<sup>一</sup>示<sup>レ</sup>儉尤<sup>ニ</sup>嚴似<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>婦人<sup>一</sup>

○衣食足而知<sup>ル</sup>榮辱<sup>ヲ</sup>一トハ聖門ノ言ニハ非サレトモ足<sup>レ</sup>食足<sup>レ</sup>兵ノ 聖語モアレハ兎角分<sup>レ</sup>祿制<sup>レ</sup>産ハ王道ノ本トナルコトニテ諸藩何方ニテモ祿ノ大小ニテ其入ノ多寡ノ差ヲ節ヨリ定メ大身獨肥<sup>ハ</sup>小身ハ瘠ルト云コト無キ様ノ制アリト聞ク此ヲ不<sup>レ</sup>患<sup>レ</sup>貧<sup>ヲ</sup>患<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>均ノ教ニ本ツケルトモ云ヘキカ今ソレ大身ハ衣食ニ餘ツテ奢リ遂ニ困窮スルアリ小身ハ衣食不足シテ困窮スルアリ同シク困窮ナリ然レトモ一ツハ奢<sup>レ</sup>ハ窮シ不<sup>レ</sup>奢サ<sup>レ</sup>ハ必スシモ窮ニ至ラス一ツ固ヨリ窮シ奢<sup>レ</sup>ハイヨ<sup>ク</sup>窮ス此同日ニシテ語ルヘキニアラサルナリ人君深ク心ヲ用ヒサルヘケンヤ

○凡ソ事ノ敗レハ多ク婦人ヨリ生ス節儉ノコト尤モ甚シトス婦人大凡道ノ知ラス理ヲ辨ヘス一向ニ容色外装ノコトハ朝夕懸念セサルコトナケレハ廉服ヲ着テモ耻ヌト云様ナルコト太難シ殊ニ高貴ノ婦人ニ於テハ平日何ノ勤勞スルコトモナク唯<sup>ク</sup>容色ノコトタニ心ヲ用ヒ故物ヲ厭ヒ新様ヲ喜ヒ田舎ブリヲ去テ都風ヲ学フト云様ナルコトニテ唯様奢ニ趨リヤスキコトナレハ節儉ノ手ヲ下スニ尤モ閨房ニ於テ嚴ナルヘキヲ覺フ

伏乞  
痛評  
某道兄

夫己氏百拜



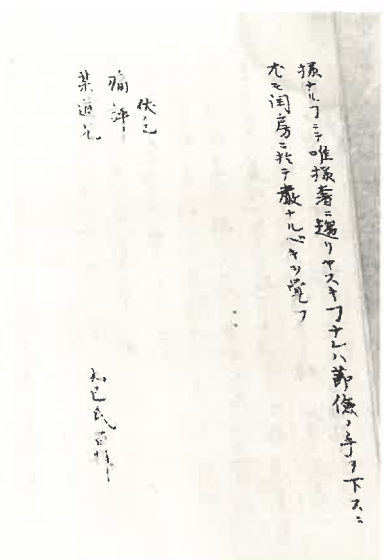
「蟋蟀之吟」第1丁目



「蟋蟀之吟」表紙(多久市郷土資料館蔵)



これらの画像は多久市郷土資料館の所蔵する「蟋蟀之吟」(原本)で、翻刻の底本としての使用と画像の掲載を快く承諾して頂きましたことに感謝申し上げます。また佐賀県立陶磁文化館の学芸員の芳野貴典氏には翻刻にあたり最後まで懇切丁寧に御指導、御教示頂きました。今一度ここに感謝申し上げます。



「蟋蟀之吟」第16丁目(最終頁)

# 華表を仰ぐ

◆◆◆  
多久市郷土資料館長 藤井 伸幸  
◆◆◆

## 第八回 東多町両子神社の鳥居

〔感應可望 護持所反〕  
両子神社は、県道別府牛津停車場線の旧納所小学校運動場付近の三叉路から、約400m西側に位置しています。

多久の儒学者深江順房が、江戸後期に執筆編集した多久の地誌『丹邱邑誌』によれば、「湯峯山熊野権現（伊弉冉尊事解男命速玉男命又十二所権現トモアレバ十二赫カ）納所村ニ在リ：社職ニ山伏立林坊天徳元年三月上旬 紀州城主秋田宮内大輔藤原豊定勅命ニテ當國ノ代官トシテ下著 熊野大権現ヲ勸詣 熊野山伏法印立真坊増延神赫ヲ守奉リ下著 菊桐紋勸許：納所村ニ建立湯峯山ト號ス 社僧立真坊二代ヨリ立林坊ト改ムル：慶長中日峯公同社へ彦山権現ヲ御勸 諸社頭再興ヲ命セラル 棟木ニモ加賀守直茂公豊前守房茂公ノ御名アリ」と記されています。

この部分は、「湯峯山熊野権現は、伊弉冉尊（イザナミノミコト）、事解男命（コトサカノオノミコト）、速玉男命（ハヤタマノオノミコト）を祀り、また十二所権現（熊野三山の祭神など十二柱の神々）とあるので十二体の神像を祀っているか。納所村にあり：社職は山伏立林坊である。天徳元（957）年三月上旬に、紀州城主の秋田宮内大輔藤原豊定が、勅命により肥前国の代官として下向した。熊野大権現を勸詣し、熊野山伏の法印立真坊増延が御神体を守り下向した。菊桐紋を勅命により許された。：納所村に建立し湯峯山と号した。社僧の立真坊は二代目から立林坊に改められた。：慶長年間（1596-1615）に日峯公（鍋島直茂）が同神社へ英彦山権現を勸請され、諸社殿の再興を命じられた。棟木にも加賀守鍋島直茂公と豊前守鍋島房茂（信房）公の御名がある。：」と解釈できます。



両子神社鳥居

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

彫刻し奉る  
湯峯山熊野十二所大権現御寶前  
石華表一柱の事  
伏して以う

□裏は遠きに非ず 此の郷に移在し 盤座して敵と爲す  
律呂は固より当たり 天徳以て往く 巳に七百霜  
紀運は舊と雖も 靈威は益彰 華表を新建す  
高大なる度量 楯で石を維く 其の質は堅□なり  
太敷の宮柱 玄黄に透徹し 衆多く□詣す  
出入りは方を知る 法雨は効力 護揚を盡くし難し  
英種は靖信 赤心は不蔵 神恵は和眩  
感應は望むべし 護持は反る所 家國の光を觀る  
橋梓は康健 百壽にして無疆なり 完固するに思ひ有り  
黎庶の永昌 茲に銘刻を勒む 興世し流芳せん  
明曆第二丙申二月朔五日

現代語訳の案は次のとおりです。  
彫刻し奉ります。  
湯峯山熊野十二所大権現の御寶前に石華表一柱を安置すること。  
伏して思います。  
（…は）遠くない近くにあり、この里に移り住み、胡座で見晴らしよくしています。律呂（十二音）の調子はもとからよく（具体的な意味不明）、天徳（元年）より過ぎること、すでに七百年になります。紀運（年周期）は旧例ですが、（神の）威光は益々明らかになっています。鳥居を新造しました。それは高大な規模で、細長い円柱で石を繋ぎ、

（正面右の柱に刻まれた銘文）  
奉彫刻  
湯峯山熊野十二所大権現 御寶前  
石華表一柱の事  
伏以  
□内は読めない文字  
□は残存する字画から推定した文字

その石質は堅□で、太くゆるがない宮柱となっています。天地に透き通り、民衆の多くが参詣し、出入りは四方にあります。仏法の恵雨は労苦していただき、（それを）護り高め尽くすのは難しいことです。英邁な檀那は穩やかに信仰し、正直誠実な心（を持ち、それ）が表に出ます。  
神の恩恵は和やかで眩しく、信心が神に通じることは望むべきです。神仏への祈願と神仏の加護は立ち返るところです。（そうすれば）家や國の繁栄を見ることが出来ます。  
父子は健康で、（ともに）百歳の寿命で限りがありません。村里を守り治めるのに思いがあります。諸人民衆が永く栄えますように。  
ここに銘文をきざみます。世を興し名を残すように。  
明曆二丙申（1656）年二月初め（一日から）五日

（正面左の柱に刻まれた銘文）  
代官 廣田内記□門  
□永□□門  
福地□左衛門尉  
秋永安□  
松□□  
野□□  
西山□□  
松瀬□左兵衛  
久平左衛門尉  
野方□□  
武富清兵□□  
平河藤次左衛門尉  
二十三人  
□□諸□□□  
早□木□右衛門尉  
□□□□  
□□□□  
□□□□  
兵衛□□

銘文の概略と補足は次のとおりです。  
檀那は多美作守藤原茂辰（二代領主）と多久長門守藤原茂矩（三代領主）、並びに常應寺の雲岳元需と清心寺の傳昌、覺圓坊立真と宮司立林坊増聞。  
代官は廣田内記□門、外十八人名。大工は武富清兵□□、平河藤次左衛門尉、二十三人、（解説できない文）三人名。

常應寺雲岳元需、清心寺傳昌、立林坊増聞については、『丹邱邑誌』によれば、「常應寺三世雲（雲）岳和尚」清心寺隆山和尚寛文三年：化」立林坊卅三世増聞法印」とあり、これらの人物をさすと考えられます。  
大工（石工）の武富清兵□□と平河藤次左衛門尉について、華表を仰ぐ第三回で紹介した東多町別府八幡神社の鳥居に「武富清兵衛清永 平河藤次左衛門信房」とあり、鳥居建立の年代も明曆二（1656）年と寛文十一（1671）で近く、同一人物と考えられます。

# 多久の百景



「西溪の翡翠」(佐賀県佐賀市 矢次一男)  
ふるさと写真コンテスト入選作品



「でかいぞー」(長崎県佐世保市 川崎信義)  
ふるさと写真コンテストグランプリ作品

## 来訪・来信・雑録

- 10月1日 ゆい工房「岸川まんじゅう屋さん」  
(講師・森 さとみ シャンポール代表)
- 10月2日 鶴山塾「楽しもう短歌⑧」  
(講師・角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 10月4日 鶴山塾「古文書教室⑤」  
(講師・舌間輝吉 多久古文書の村)
- 10月7日 鶴山塾「中国古典の扉⑤」  
(講師・武田耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
- 10月11日 多久聖廟合同美化活動  
秋葉絵練習
- 10月23日 多久聖廟合同美化活動  
秋葉絵練習
- 10月26日 鶴山塾「古文書教室⑥」  
(講師・舌間輝吉 多久古文書の村)
- 11月1日 鶴山塾「多久的歴史と文化を学ぶ講座」日本磁器の  
開発と展開―特別企画展「初期伊万里ビッグバン」  
でたどる草創期の磁器生産―
- 11月6日 鶴山塾「楽しもう短歌⑨」  
(講師・巖 由季子 佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員)
- 11月6日 鶴山塾「楽しもう短歌⑩」  
(講師・角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 11月6日 有田町同朋・同朋広瀬・同朋天神保育園来訪  
(論語素読会)
- 11月8日 佐賀県文化芸術祭ライブズビヨンド  
II「風景を聴く」公演(多久聖廟内)
- 11月9日 関西多久会参加  
鶴山塾「中国古典の扉⑥」
- 11月11日 鶴山塾「中国古典の扉⑦」  
(講師・武田耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
- 11月20日 事務局打合せ(漢詩コンテスト・新年の集い等)  
株式会社「A食糧」さが合格縁起米奉納式
- 11月21日 第28回全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式  
公開講演会「漢詩の性質」漢字を使う意味
- 11月29日 公開講演会「漢詩の性質」漢字を使う意味
- 12月1日 (講師・宇野茂彦 公益財団法人斯文会理事長)  
草場佩川の会「佩川さんを学ぶ会・ひゃあご祭り」  
(郷土資料館)
- 12月2日 鶴山塾「中国古典の扉⑧」  
(講師・武田耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
- 12月3日 ゆい工房「本格蕎麦打ち(後期)」  
(講師・岸川和則 塩田津ソバの会)
- 12月4日 鶴山塾「楽しもう短歌⑪」  
(講師・角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 12月6日 鶴山塾「古文書教室⑦」  
(講師・舌間輝吉 多久古文書の村)
- 12月7日 多久市論語カタル大会  
多久聖廟イルミネーション点灯式
- 12月15日 台湾大学佐藤将之特聘教授他4名来訪  
(聖廟、朝山文庫研究)
- 12月21日 九州大学藤井倫明準教授、東北大学齋藤智寛教授来訪  
(聖廟研究)
- 12月23日 九州大学藤井倫明準教授、東北大学齋藤智寛教授来訪  
(聖廟研究)
- 12月26日 多久聖廟お火たき
- 12月31日 多久市新年の集い(於・天山多久温泉T.A.Q.U.A)

- 1月6日 鶴山塾「中国古典の扉⑨」  
(講師・武田耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
- 1月8日 鶴山塾「楽しもう短歌⑫」  
(講師・角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 1月10日 令和7年度第1回絵馬奉納式(多久市観光協会)
- 1月10日 鶴山塾「古文書教室⑧」  
(講師・舌間輝吉 多久古文書の村)
- 1月12日 鶴山塾「多久的歴史と文化を学ぶ講座」佐賀藩成立  
の立役者、多久安順の時代
- 1月24日 (講師・野下俊樹 佐賀県立図書館郷土資料調査・編  
さん課 主事 学芸員)
- 1月27日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」草場船山が  
見聞させた松浦地方の史話、名護屋城跡、小川島  
捕鯨
- 1月27日 (講師・安永浩 佐賀県立佐賀城本丸歴史館 企画学  
芸課長)
- 1月27日 市の財政援助団体等監査  
鶴山塾「中国古典の扉⑩」
- 2月3日 (講師・武田耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
- 2月4日 ゆい工房「水引で結ぶ季節のかざり」ひなまつり
- 2月4日 (講師・小川真由子 さがみずひき)
- 2月5日 鶴山塾「楽しもう短歌⑬」  
(講師・角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 2月7日 鶴山塾「古文書教室⑨」  
(講師・舌間輝吉 多久古文書の村)
- 2月7日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」草場船山の  
政治思想―「蟋蟀之吟」を読む―
- 2月7日 (講師・芳野貴典 佐賀県立九州陶磁文化館学芸員)
- 2月27日 東原産舎消防訓練  
孔子直系嫡孫孫垂長氏へ理事長表敬訪問(台湾へ)
- 2月28日 令和7年度第2回絵馬奉納式(多久市観光協会)
- 2月28日 令和7年度第5回理事会  
鶴山塾「中国古典の扉⑪」
- 3月3日 (講師・武田耕一 公益財団法人孔子の里 理事)
- 3月5日 鶴山塾「楽しもう短歌⑭」  
(講師・角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 3月7日 鶴山塾「古文書教室⑩」  
(講師・舌間輝吉 多久古文書の村)
- 3月19日 令和8年春季積業委員会  
令和7年度第2回臨時評議員会
- 3月24日

## 編集後記

多久聖廟は年末年始には多くの  
方々にご参拝いただきます。参拝者をお出迎える  
ために今年で17年目となる地元の「多久美化クラブ」  
のメンバーたちによる50万球のイルミネーションの  
飾り付けが行われました。大晦日の多久聖廟お火た  
きや積業前の美化活動など、改めて多くの地元の皆  
様に支えられていることを実感しています。(む)